

何故新型コロナウイルス感染症がスーパーノヴァなのか ジョン・スミス著、脇浜義明訳
原典：OpenDemocracy, 2020, 3, 3

2016年「債権王」と呼ばれたビル・グロスが「グローバル的に金利は500年で最低だ。10兆ドルのマイナス金利の債権だ。これはいつか爆発するスーパーノヴァだ」とツイートした。そのスーパーノヴァが一段と近づいてきた。資本主義は誕生して数世紀間で最大の危機に直面している。何億人もの労働者の生活を破壊するグローバル不況はすでに始まっている。この不況は欧米の労働者よりもアジア・アフリカ・ラテンアメリカの労働者をより厳しく苦しめている。極貧で生存を脅かされているこれらの労働者は、そのうえ新型コロナウイルスで命を脅かされている。利己主義と欲望と競争を基盤とする資本主義が人間的文明と相容れないことが、今やますます明らかになっている。

何故スーパーノヴァ一星の寿命が終わり爆発して死滅する一が、未来のメタファーとなるのであろうか。何故人間の髪の毛直系の千分の一の大きさにすぎない有機物新型コロナウイルスが、このような終末論的大変動の触媒となるのであろうか。労働者、若者、虐げられた世界の人々が自らを守り、「古き世界の灰の中から新しい世界を創り出す」（米国労働歌「永遠なる連帯」(Solidarity Forever)の歌詞) ためには、何をすればよいのだろうか。

これらの問いに答えるためには、2007年に始まった「グローバル金融危機」が何故一般金融危機以上のものであったのか、何故G7各国政府がささやかな安定回復を取り戻そうとして採った緊急措置—ゴールデン・サックスの銀行家が「金融市場向け麻薬」と呼んだ「ゼロ金利政策」—が現在の危機条件を作り出したかを理解する必要がある。

グローバル資本主義の基底的健康問題

スーパーノヴァの第一段階は内破である。内破は2007年の金融危機前から始まり、以来どんどん加速し、2020年1月新型コロナウイルス感染症発生の時に崖から転落する長期的金利低下のようなものである。金利低下の基本的要因は二つ—利潤率下落と資本の肥大化である。その傾向の増大速度は、資本主義が生き延びるために必要とする新しい血液を労働者と農民が提供する速度よりも速い。マルクスが『資本論』第一巻で書いたように、「資本の唯一の原動力は自らを活性化する力、つまり剰余価値を産み出す力である・・・資本は、生きた労働力を吸収することによってのみ吸血鬼のように活気づき、しかもそれをより多く吸収すればするほどますます活気づく、死んだ労働である。」

利潤率低下を危機のときだけに現れる現象だとして、それを隠し、あるいはそれを避けるために、様々な方法が用いられてきた。生産拠点をヨーロッパ、北米、日本から賃金の安い第三世界を移して搾取率を高めるのも、その方法の一つである。あるいは、利潤低下傾向を嫌う資本投資家は、生産産業ではなく、ブランド戦略、知的財産、その他寄生的・非生産的の事業に投資するようになった。このように資本家の生産投資ストライキは生産の

周辺部移行という形で増強してきた。新工場建設とか技術革新よりは労賃切り下げによって利潤を得ようとするやり方である。こういうやり方で利幅を大きくして巨大な富を蓄積したが、その富は生産用途に費やされないの、資本がどんどん肥大化した。

資本の肥大化から生じるのは利率低下である。資本家は競い合って金融資産を購入するので、当然資産価格が上昇し、それらが産み出す収益も減少する—つまり、投資金当たりの利率が低下するのである。利率低下と資産価格上昇は一つの循環を構成する。あらゆる種類の資産に投資するために銀行から巨額の金を借り入れ、その競争からさらに資産価格が吊り上がり、従ってさらに借り入れを増やして競争、また価格が吊り上がるというバブル循環である。

利率低下から二つの結果が生じる—資産バブルと債券の山。この二つはコインの裏表である。債務者が居れば債権者がいる。誰かの負債は誰かの資産だからである。資産バブルは

萎む（生産性が向上すれば）か、さもないと破裂する。経済成長が時間をかけて負債の山を侵食するか、さもないと負債の山が崩れ落ちる。

2008年以降世界中で生産性が停滞、この10年間のGDP成長は第二次世界大戦後のどの10年間よりも低かった。その結果、経済学者スリエル・ルビーニが「すべての資産バブルの母」と呼んだ事態となり、同時に、すでに2008年金融危機以前から巨大化していた累積債務（政府、企業、世帯の負債の総計）が2倍以上に膨れ上がった。特にグローバル南諸国の債務増加が顕著であった。グローバル南の大きな国30か国の債務総計は2019年に72.5兆ドルに達した—国際決済銀行によれば、過去10年間で168%の増加であった。そのうち中国の負債は43兆ドルで、10年前の10兆ドルからの大増加であった。要するに、新型コロナウイルス感染症出現以前からグローバル資本主義はすでに「内在的健康問題」を抱えていて、集中治療室へ入って当然の状態であった。

だからグローバル資本主義—以前の資本主義以上に貧しい国の低賃金労働者への超搾取に依存する寄生虫的なので、以前以上に帝国主義的である—がスーパーノヴァ、資産バブル破裂と負債の山崩れへと向かうのは必然的である。帝国主義国政府と中央銀行はこの不可避的処罰の日を先延ばししようと、2008年以降ずっといろいろな手を打ってきたが、もう逃げられない。

10年物米国債は安全債券と考えられ、他の債券の価格の基準となっている。不確かな時代には投資家は株式市場から安定した国債市場へ逃げ出す傾向があり、そのため株価が下落、公債—「確定利付債権」と呼ばれる—の価格が上がる。公債価格が上がると、利子が固定しているので、利率が相対的に低下する。ただ、3月9日にはそうならなかった。この日株価は急落したが、10年物米回国債の価格も下落、その利率が上昇したのだ。ある債権トレーダーによれば、「統計的には、こんなことが起こるのは数千年に一度だ」という。実際、2008年9月リーマン・ブラザーズが経営破たんしたグローバル金融危機の真ただ中でも、こういうことは起きなかった。

この軽い心臓発作の直接的原因は、株・債券取引市場で資産破壊が進行したので、投資家たちが慌てて投機的投資を現金に換えようとしたからだった。ファンドマネージャーも容易に交換できる資産を売らざるを得なくなり、確定利付き債券も安全というステータス価値を失った。政府と中央銀行は狼狽え、緊急対策としてバズーカ砲を発射、つまり何兆ドルもの救済金を抛出、際限なくドル紙幣を印刷して市場に垂れ流した。こういうやり方自体が未来の不幸の徴候となるのだ。バブル破裂のとき、ドル紙幣も株券や債券と同じように紙切れとなった。そんなときに、2020年3月のコロナウイルス・パンデミックが追い打ちをかけ、投資家がキャッシュ、経済、経済を裏から支える政府の力への信頼を失うことになる運命の日を近づけたのだ。スーパーノヴァが近づいてきたのだ。

左派の帝国主義否定と「カネの成る木」信仰

帝国主義諸国の左派たち—英国労働党のジェレミー・コービン派、アン・ペティフォー、ポール・メイソン、ヤニス・バルファキスなどの種々の左派ケインズ主義者、米国のバーニー・サンダース支持者たち—は二つの点で共通している。一つは、多かれ少なかれ、帝国主義的植民地あるいは新植民地収奪は過去のことで、現在の富裕国・貧困国の関係を規定するものではないと考えている点。二つは、積極財政出動を可能にする何らかの「金の生る木」¹を信じている点。換言すると、利率のマイナス領域への低下を体制危機を表す赤信号、即ちスーパーノヴァの内破段階と見ないで、公的投資、社会的支出、グリーン・ニュー・ディール、そして少しばかりの対外援助増加を可能にする負債増 OK とする青信号と見るのだ。しかし、実際には、金の成る木なんか存在しない。政府が何兆ドル赤字国債を発行しようと、中央銀行がいくらドル紙幣を印刷しても、資本主義がこの危機を逃れることはできない。かつてネオリベリズムはこの「金の成る木」論を否定していたが、今はそれにしがみついている—彼らが如何にパニック状態であるかを如実に示している。溺れる者藁にもすがらるのだ。2007~08年危機で政府が赤字支出した数兆ドルが実現したのは、ゾンビーのよう

な10年間の生存であった。しかし、今度のコロナ危機ではそうはいかないだろう。スーパーノヴァが時間の問題として接近している。

コロナウィルス—大変動への触媒

このパンデミックは最悪の時期に起こった。ユーロ圏の経済がゼロ成長、ラテンアメリカやサハラ以南アフリカが不況、トランプの企業優遇政策で一時的に活気づいた景気が萎み、米中貿易戦争がサプライチェーンを混乱させ、それにEUも巻き込まれ、世界各国で人民が抗議デモを展開している真ただ中で起こったのだ。

利率は深くマイナス領域である—しかし、負債がGDPに占める割合が異常増加しているイタリア、既存債務を借り換えようとしている借金企業、いわゆる「新興市場」に関しては、事情が異なる。だが、3月9日以降、企業利率は天井知らずに上昇している。企業は借入できないのだ。投資銀行が企業に融資を拒否、企業はグローバル・マイナス金利の中で貸し流りに直面しているのだ！それ故、欧州中央銀行が投資銀行から7500億ユー

ロを借り入れ、これらの投資銀行が購入しない企業社債を購入することを決定したのである。それ故、米国連邦準備銀行も同じことをもっと大規模に行っているのである。イタリアの（そしてEUの）運命は、ドイツ連邦銀行が民間債権者銀行に取って代わる意志があるかどうかにかかっている。もしドイツ連邦銀行にそういう意志がないならば、EUの死ぬ間際の苦しみの最終段階となるであろう。

3月中葉、帝国主義諸国の政府は自国の経済救済として、4.5兆ドルを支出する計画を発表した。3月26日、G20（G7の帝国主義国にBRICSを含む新興国を加えたもの）が緊急オンライン・サミットを開き、5兆ドル以上をグローバル経済に注入すると宣言した。「グローバル」という言葉を使ったが、内実は「国内」を意味した。この財政出動に対し先進国の左派は、自分たちの主張が正しかったと手を叩いて喜んだ。「金の成る木」が存在したのだ、と。しかし、彼らは、こういう財政出動が2008年にもあったことを忘れている。私的債務の社会化である。しかし、ポスト2008年と異なり、今回はうまくいかないであろう。それに、帝国主義政府が遅ればせながらパンデミック対策に医療資源などを独占動員に踏み切ったが、これまで搾取してきた貧しいグローバル南の人々を見殺しにした。先進国左派も自国政府の緊急現金投入が第3世界の貧しい人々を考慮していないことに、何も言う気配がない。グローバル南の国々は嫌でもIMF貸付を求めて長い列を作っている。3月24日現在で、80か国がIMFに貸し付けを申請しているが、IMFが用意しているのは1兆ドルである。1兆ドルは大金だが、『フィナンシャル・タイムズ』のマーチン・ウルフ記者が言うように、「発展途上国の対外金融ギャップ総計はIMFが用意する金額をはるかに上回っている」のだ。

さらにウルフが言うところによれば、IMF貸付は「対外的金融ギャップ」を埋める、つまり帝国主義国の債権者を助けるのが目的で、負債国の民衆を助けるものではない。しかも融資条件が非常に厳しくて、民衆に過重負担を強いるのだ。その意味でIMFの救済プログラムは帝国主義政府の資本家救済政策と同じで、公共福祉とか労働者の賃金の部分的肩代わりのための公的支出というような性格はまったくない。帝国主義政府は緊急事態下で働けなくなった労働者の賃金を肩代わりする公共支出をしているが、それは労働者階級を懐柔するためである。あくまで自国民労働者が対象で、これまで搾取してきたアジア・アフリカ・ラテンアメリカの労働者は対象にならない。

3月24日、国連はアジア・アフリカ・ラテンアメリカのコロナ対策資金として20億ドルの拠出を加盟国に呼びかけた。20億ドルというのは、英国のNHS（国民医療サービス）の年次予算の80分の1であり、帝国主義諸国が自国の資本主義経済を延命させるために支出計画している4.5兆ドルの2000分の1以下である。また、それは、3月の3週間に帝国主義国の投資銀行が発展途上国から吸い上げたカネ—IMFのクリスタリナ・ゲオルギエバ専務理事が「史上最大のキャピタル・フロー」と呼んだものの40分の1である。世界銀行のディビッド・マルパス総裁は、G20終了時に、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの

「新興市場」（発展途上国を表す表現）の救済として向こう15カ月で「1600億ドル救済プログラム」を企画すると発表した。その額でも、これから始まるグローバルな経済の嵐が貧しい国の民衆に課す経済的損失のごく僅かな部分的穴埋めにもならない。

「我々は果たすべき革命的任務がある」—イタリアで活動するキューバ人医師レオナルド・フェルナンデス

では、何を為すべきか。大企業救済の支出を支持するのではなく、大企業から特権を取り上げるべきだ。立ち退きや滞納家賃取り立てを一時停止するのを要求したり支持するよりは、労働者や小商人を守るために不動産所有者から物件を没収すべきだ。未来社会のために、資本家の資産権利よりも民衆の生きる権利を守るべきだ。

現在優先すべきは、人々の命を守るコロナウィルスとの闘いである。これが意味するのは、パンデミックへの脆弱性が最も大きい人々—ホームレス、囚人、圧政や戦争の中で亡命を希望している人々—やグローバル南のスラム、掘っ立て小屋地区、難民キャンプなどで暮らす人々に連帯の手を差し伸ばすことだ。インド銀行の元総裁ラグラム・ラジヤンは「治療法とワクチンの開発を待っている間に、世界は各地でウィルスを封じ込める闘いを行い、それが脆弱なところに広がらないようにする」と言い、『エコノミスト』も「新型コロナウイルス感染症が発展途上国を襲うのを放置しておく、それは必ず先進国にも跳ね返ってくるだろう」と書いた。

コロナ・パンデミックは、我々が必要とするのは NHS(国民医療サービス)というより GHS(国際医療サービス)であることを物語る疫病である。この原則に基づいて行動している国はキューバだけである。キューバは2万8千人の医師を61か国の貧しい国に送り出して無料医療活動を行っている。イタリアにも52人派遣している。さらに、120人をジャマイカや他の国々にも派遣し、パンデミック対策を援助している。去年1万人のキューバ人医師をテロリストだと難癖をつけて追い出したブラジルの極右ボルソナーロ政権ですら、今になって追放したキューバ人医師に戻って来て欲しいと懇願している。

我々はキューバの医療国際主義を見習うべきである。キューバの革命的医師と人民と共同歩調をとるべきだ。キューバの国際主義を我々も実行しなければならない。換言すると、資本の独裁に代わって働く人々の権力を対置しなければならない。コロナウィルス・スーパーノヴァは、社会主義革命が緊急的で実際的な、絶対に必要な課題、人間文明を存続させたいならば、自然破壊—コロナ疫病はそれから誕生した—を終わらせたいならば、絶対に避けて通れない課題であることを、明確に示している。

訳注

¹ 政府は自国通貨立ての国債を幾ら発行しても、紙幣を印刷すれば済むので、個人や企業のように返済上の制約はないという貨幣論がある。